



### 清水山憩いの森と

### カタクリ群落

文化財保護推進員 檜山月子

立春も過ぎ、春の光が雑木林の梢から地面を温める頃になると、ポツンポツンとカタクリの芽が出てきます。この頃は、一枚葉で、

花はつきません。三月の中旬に出だす二枚葉に、花が付きまします。今では、清水山のカタクリ群落は、都内では貴重な存在となりました。

かつては、チラホラと咲いていた程度でしたが、区の厚い保護、指導員の森田さんや守る会の方々の努力により20万株にもなっています。それが、隔年に10万株の花をつけ、まことにみごとです。

土地所有者の五十嵐和男さんの話により、まず、「このカタクリの発見者は、武蔵野の雑木林を調査中の牧野富太郎博士です。当時



▲カタクリの花

の土地の人々には、カタクリという名すら、余り知られていなかった」とのことでした。

カタクリの花は、年を経るごとに艶が出てくるということですが、最近の花は、薄い紫紅色で栄養不足のようです。花のいのちは、七日から十日で、開花は桜とほぼ同じです。

また、二年程前から変種の白い花が二株ほど見られるようになりました。

カタクリが自生するには、清水の湧き出る湿地帯で北斜面の雑木林が適しています。清水山は、この条件にピッタリと言えましよう。

カタクリは、古代野草といわれ、日本列島の早春の山野を彩る美しい球根植物で、万葉集巻19に次のように歌われています。

「もののふの 八十をとめらが汲みまがふ 寺井の上の 堅香子の花」——大伴家持——

清水を汲みに集まる乙女たちの姿を彷彿させるものがあります。

「堅香子」は、万葉仮名であり、現代風に表わすと「片鹿子」ではないかとの説があります。一枚葉（片葉）に鹿の背のような斑点模様がついているからかも知れません。

「南側の雑木林を開墾した時、黒土とローム層の境界辺りから、ヤジリや縄文土器が多数出ました。戦前は、白子川から取り入れた用水で水車を廻し、そのたもとに水神様を祀り、清水山は、村人の憩いの場でもありました」

### 清水山憩いの森



と五十嵐さんは、熱っぽく語られました。私共は、カタクリの花の美しさをめ度ると共に、近くの稲荷山図書館に展示してある稲荷山遺跡の出土品などと合わせて見ればいかがでしょうか。きっと、清水の湧き出る憩いの森での古代人の生活の営みや息吹きを感じとることができると思えます。

### 滝口宏先生逝去



練馬区文化財保護審議委員会、早稲田大学名誉教授、考古学専攻 滝口宏氏（81歳）は、去る1月30日に逝去されました。ここに謹んで、ご冥福をお祈り申し上げます。

郷土資料室収蔵品シリーズ 第11回



無煙炭を主原料とし、コークス・木炭などの粉末に、ピッチなどの結合剤を加えて圧縮してつくったのが練炭。一般には円筒形でれんこんのような穴のあいたものを指し、楕円状に小さく固めたものを豆炭という。

練炭・ひよつと・練炭火鉢

練馬区文化財保護条例施行規則に基づき、昭和63年2月に委嘱した練馬区文化財保護推進員も、2月1日で4年目を迎え、この度の12名の方々が再任されました。

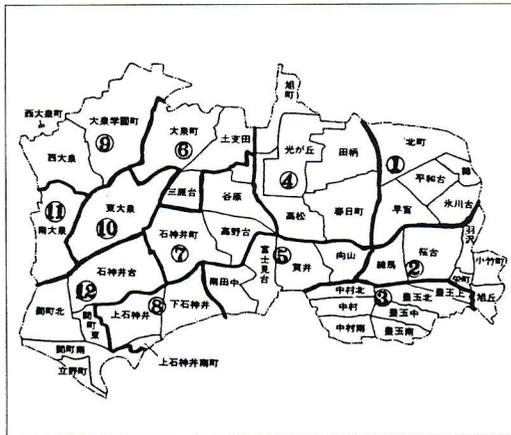
文化財保護推進員 第3期へ

区内を12の地域に分けて、区域内にある文化財の様子を確認したり、文化財保護の考え方を広めたりと活躍いただいております。

火力が強く、ながもちするので経済的であるが、火付きが悪いので「ひよつと」といわれる練炭おこしが使われた。はじめ悪臭があり、気をつけて部屋の換気をはからないと中毒することがあるのが欠点である。

練炭は、明治初年に長崎で発明され、東京で「角型塊炭」という名称で四、五cm角の固形燃料として販売されたのが最初である。その後、海軍では黒煙を吐く石炭の代わりに、「角炭」として軍艦に使用した。

他方、一般用としては、群馬県を中心に養蚕室の保温用として普及していった。もちろん、庶民生活の燃料としても重用された。しかし、昭和三十年代も半ば過ぎるころからは、燃料全般の石炭離れが進みにしたがって、練炭を見かけることが少なくなった。



地区	担当地域(一覽)	敬称略
1	亀井	彦
2	鈴木	曹元
3	伊藤	新一
4	桑島	新一
5	岩崎	美智子
6	瓜生	清勇
7	林	淳子
8	長坂	淳子
9	檜山	月子
10	石井	薫
11	荒井	道子
12	井口	敏

〔出版情報〕

発掘調査報告書

◎中宮遺跡

早宮3丁目

◎東早淵遺跡

縄文時代竪穴住居址他

◎東早淵遺跡第4地点

早宮1丁目

旧石器時代の礫群他

1300円

1700円

## 桜の花

文化財保護推進員 亀井邦彦

その昔、農業の出来、不出来を花の散る時期の遅速でうらなったといひます。特に桜の花はその代表的なもので、花が早く散ると不作になるといひので、そのことばかり気になり、とても観賞などしてられない、このため万葉集などに桜をうたった歌が少ないのだ、ということが折口信夫博士の『民俗学』の中に書かれています。

また桜の花は毒を消すともいわれ、玉川上水沿いに植えられていたのは有名です。その分水である千川上水沿いにも桜が植えられて



▲千川通り 江古田駅付近 昭和10年頃

いました。これは大正四年(一九一五)の大

正天皇御大典を記念して植えられたものですが、戦時中に燃料用として何本かが伐られたといわれ、戦後の千川上水暗渠化に伴ってまた伐られました。

しかし、最近桜台付近の千川通り沿いに桜が植えられ、その記念碑が桜台駅前の千川通りに建っています。

「千川通りに桜を植える会有志一同」で建てた「桜の碑」。建立は昭和六二年五月で、桜の碑は区に寄贈されています。

## 妙福寺さん

文化財保護推進員 荒井道子

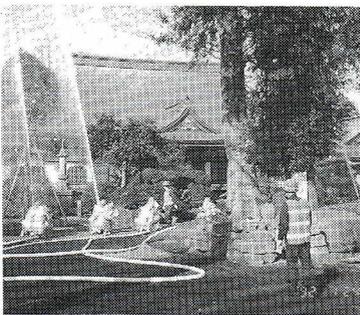
一月二十四日、保育園で親しまれている「妙福寺さん」へ出かけた。昔は荷車が朝早く野菜等積んで目白方面へ出かけたという道が、今は車が激しく往来する。その道を二十分程歩いて寺へ着く。ちょうどよい散歩である。

どっしりした山門をくぐると、すっかり葉を落とした老樹の梢ごしに青空が広がる。参道の桜の幹をすかして、本堂の屋根の反りが変わらず美しい。今日は文化財防火デーにちなんでの消火訓練とあって園児・小学生等が集まっていた。

「訓練開始」赤い煙がお堂の前に立ち登る

や、かん高いベルがたちまち呼応し、御前様が足早に四人従えて現れ、消火器の泡がまかれた。消防車がかけつけ境内の黒土の上に布ざらしのようにホースが何本も並べられ、銀ネズと緑色の消防士がキビキビと動いて一点に固まり、ホースがむくむくと太くうねり、先端から白煙がまいた。この間アツという間の出来事であった。七本のホースが繰り出す白煙から虹が生まれて、参会者からホーツというため息がもれた。放水止めの号令でわれにかえる。この壮観な訓練で妙福寺の文化財の安全は約束されているのである。

この後、瓜生先生の説明で、庭等廻り楽しい一刻をすごした。山茶花の赤い花を従えて古い蔵手がキリツとひきしまった燈籠なども目に鮮やかに残る。練馬の大切なものを守っていく努力を見せられた一日であった。



▲文化財防火デーの様子 (妙福寺にて)